

『函館おしまホスピス元年』

平成16年もあとわずかで終わる。今年は何よりホスピス開設という大きな夢が達成できたことで、病院にとっても、また自分の人生の中でも特に忘れられない1年であった。ひとえに今まで支えてくださった方々のおかげであり、また職員の奮闘によるものと思っている。そして、私自身は「夢はあきらめないで、持ち続けるもの」。そう言い聞かせてここまでやって来た。

2年前の1月5日、私は夢と希望を抱き、この病院の初出勤の日を迎えた。しかし、その思いは直後からもろくも崩れ去り、「ホスピスの夢」が一瞬のうちに遠のいたように感じた。いや、正直もうホスピスを立ち上げるのは無理なのではないか、とさえ思った。それほど、この病院は改革が必要であった。しかし、「ホスピスの理念」を掲げ、耐えることと、あきらめないことを忘れずに病院改革に取り組むうちに、志を一つとして、色々な人が私の周りに集まって来た。

たとえば、道南で初めてのホスピスを立ち上げようとしていた旧K病院時代のスタッフが一人一人仲間に加わってくれた。ソーシャルワーカーしかり、放射線技師長しかり、看護師長しかり。皆、あの時にかみ損ねた夢を私の夢にだぶらせて着任してくれ、あえて一緒に苦しい時期を共有し、私とともに乗り越えてくれた。皆の熱い思いが病院を全く新しいものに変え、



生まれ変わったこの病院において、ついに皆のホスピスが完成したのである。竣工式ではそれぞれの胸に去来するものがあったことだろう。

ホスピス開設に向けて準備している中、九州から頼もしい助っ人（看護師）が時間差で2人もかけつけてくれた。最初は「えっ！本当？」と耳を疑った私は、「きちんと親の承諾を得てから」と、いつになく冷静になっていたが、ホスピス経験の長い2人の加入はなんと心強いことであったことか。開設して8ヶ月、なんとか軌道に乗り出したのも彼女らの力によるものが大きい。

そして病棟には博多弁が飛び交っている（笑）。

多くの人が病院を去り、またそれ以上に新しい人がメンバーに加わり、またこの過渡期に病院に踏みとどまって頑張ってくれた人もいる。病院改革における職員の奮闘ぶりはいずれ別の機会に書いてみようと思う。忘れてならないのは、私の夢の結実は、私一人では成し得なかった。そして、職員一人一人の働き無くしては、ホスピスはもちろんのこと、病院自体がその存在すら危ぶまれていたということなのである。

11月22日、私は母校・金沢医科大学の講義室の壇上に立っていた。緩和ケア研究会で講演を依頼され、久しぶりに金沢の地を踏み、「医の原点 ホスピスのこころ」と題して1時間あまり話をした。ここでは、私の医師としての原点、大学病院時代にかかわりを持った患者とのかかわり、栄光病院時代、そして今の取り組みを紹介させていただき、私が一般臨床医からホスピス医とい

う立場となり、今、自分の中で行き着いたところ、それは「ホスピスのところは医の原点である」ということを強調してきた。

6年前に大学を飛び出した時には、よもやこの母校でホスピスについて講演するなどとは考えてもみなかった。あの時はただホスピスをやりたい一心で福岡へ飛び立ったのである。そのことを思い出すだけで、とても感慨深い一日であった。1時間があつという間に過ぎていった。

まだまだ私は前へ進まなくてはならない。それが支えてくれた人々への感謝の気持ちであり、恩返しであるから。

函館おしまホスピス元年はもうすぐ終わろうとしている。

そしてもっと先を見据えている。

